

展」を椎名宏雄氏が、「南宗燈史の主張」を鈴木哲雄氏が、「禅宗燈史の発展」を田中良昭氏がそれぞれ執筆している。

つぎに、初期の禅語録については、「楞伽宗と東山法門」について中川孝氏が、「北宗禅と南宗禅」について篠原寿雄氏が、「牛頭宗と保唐宗」について平井俊栄氏が、「念仏禅と後期北宗禅」について田中良昭氏がそれぞれ論究している。

さらに、禅僧の偈頌については、「修道偈」について田中良昭氏と川崎ミチコ氏が、「伝法偈」について石井修道氏が、「礼讃文・塔文」について川崎ミチコ氏が、「通俗詩類・雜誌文類」について川崎ミチコ氏がそれぞれ執筆している。

さらに、禅僧と注抄と疑偽經典については、「経疏・要抄」と「疑偽經典」に分けて岡部和雄氏が論究している。

さらに、中国禅とチベット仏教については、「摩訶衍の禅」について山口瑞鳳氏が、「敦煌出土のチベット文禅宗文献の内容」について沖本克己氏が、「敦煌出土のチベット文禅宗文献の性格」について木村隆徳氏がそれぞれ執筆している。それぞれの詳しい項目についての紹介は省略するが、一見、それぞ

れ執筆者に人を得て洩らすところがない。

上によって知られるように、本書は敦煌仏典に関するそれぞれの専門家の研究であり、しかも最近の研究成果を踏まえた論集でありながら、読者をして自から広い視野と高い展望を与えるように編まれている。その意味において、本書は禅の側からみた敦煌仏典の総合的研究であり、過去八十年の禅籍研究の総括であると言えよう。

とくに、柳田聖山氏の執筆にかかる「総説」は、「敦煌の禅籍と矢吹慶輝」・「敦煌本六祖壇經の諸問題」を中心に論じたものであるが、敦煌文献が我が国にもたらされた最初か

新田雅章著

『天台実相論の研究』

はじめに

もう短かいとは言えなくなった私の、天台研究生活の中で、『天台実相論の研究』という書名の著述を手にするのは、これで二度目

ら、今日の研究状況にいたるまで、それぞれの先達の占める位置と意義とが詳しく紹介され、敦煌本に占める禅宗文献の意義を一望のもとに展望させるものとして有益であり、また興味津々たるものがある。

筆者としては、本書の大部分の執筆が本学関係者によってなされていることに深い喜びを感じるのと同時に、本学禅学陣のレベルの高められたことに敬意を表し、今後の一層の精進を祈ってやまない。

(大東出版社、昭和五十五年十一月二十七日発行、七五〇〇円、B5版、本文四六六頁)

山内舜雄

である。

一度は、いうまでもなく、石津照璽博士の『天台実相論の研究』である。この書が終戦後まもなく上梓された時は、やつと天台学に研究の指標を樹てた頃で、紙質も装本もお粗

末の一語に尽きる仙花紙の初版本は、今もなお筐底にある。

石津博士は周知のごとく宗教学の權威、日本宗教学会長の頃、本学の大学院に來られたのは記憶もあらたなところ。それにしても『天台実相論の研究』という同名の書が、ともに哲学分野からの研究者によって撰せられているのは、単に奇縁とのみ云うことはできないであろう。石津博士の同書を見れば明らかな如く、宗教学からのアプローチであることは論を俟たないから、あえて両者を哲学分野と見なしたのであるが、前者が実相論の内容的理解を重点的にこころみるのに対して、後者は後に詳しく紹介するごとく、智顛の全教学体系の組織的解明にあるのであるから、書名の同じきを以て両者を比較することはいささか無理というものであろうか。

同じ哲学分野からの研究というのなら、私の識るもう一人の畏敬する天台研究者安藤俊雄博士のそれとは、かなり同質なものを感じるといふことができる。

それは後程、詳論するとして、文献学や書誌学があたかも研究の大宗であるかの如き今日、このような智顛の思想的体系を哲学的に究明する書が公刊されたのは欣快に堪えない。

い。

わづか一と月ほど前の四月中旬、念願の天台山拝登を遂げ、真覺寺に智者大師の舍利塔を拝したのであるが、われながら到らぬ『摩訶止観』の講義も、早や二十年に垂んとすることを想うと、慚愧の念にかられると同時に、なにやら安堵らしきものを得たのも事実である。

折しも新田博士より新著の寄贈を受けたのを好縁として、すこしく腰を据えて書評をこちみてみよう。

一

本書は、著者みづから「はしがき」に言うごとく、三大部中心の智顛の教学思想を、それまでの形成過程に重点を置きつつ、最初期から晩年へと、「いわゆる実践観と実相観とを軸にしてまとめ」たものである。

いま、その全構成を本書に従って示せば、先づ序章「著述と思想の時代的展開」において、「著述の取扱い」（第一節）方の基本的態度を述べ、「智顛の思想形成の時代区分と著述の成立の前後の關係」（第二節）を論定している。本書成立の基本的立場がそこに論究されているのは云うまでもない。

第一章は、「初期実相論の体系」と題されて、『次第禅門』を中心としてみた初期実相論の体系」（第一節）が説かれる。

「智顛の思索の動向を最初期から時代を追って眺めながら、思索の高まりの過程を辿るということ」に「方法的関心」を示された著者としては、当然とり組まねばならぬ最初の問題が、『次第禅門』と後の『摩訶止観』との關係であろうことは容易に推察がつく。著者は「行の体系」（第一項）において禅観体系の構造をかなり詳しく明かし、「実相」（第二項）において「その内的構造」の解明に力を注いでいる。

そして「初期実相論の体系化を導いた教理的背景」（第三項）において、『大智度論』との關係」と「慧思教学の及ぼした影響」を追及している。

『次第禅門』は大部であり、その体系的理解は容易でないが、通常『智度論』との關係や慧思教学の影響などに関する論攷の多いのは見るが如くである。

この点、著者は、『次第禅門』の禅観体系や、その内的構造の究明に、多くの紙幅と努力を割いている。歴史考証的な研究の多い今日、このような禅観の体系的思想的把握の確

かさは、やはり著者が哲学出身なることを物語って興味ぶかい。

いま正確に比較する資料は手元にはないが、安藤俊雄博士の業績からは似た印象を受けるのは、筆者だけであろうか。

『次第禅門』に次いで『方等三昧行法』における実相論の初期的性格が考察の対象とされる。(第二節)

まず「選述をめぐる問題」(第一項)において、内容面からの吟味と他の方等三昧関係論書を考究し、『方等三昧行法』選述の思想的意味(第二項)とその実相論としての初期的形態を、実践観と実相観との両面から追究している。(第三項)

初期実相論の体系を、『次第禅門』だけに集約せず、『方等三昧行法』を加えて考察したことは、後述するように著者の見識を示したものと云えようが、問題点もあるだけに興味ぶかい。

以上を以て初期実相論の基本的構格を収束したのち、その変容を論究したのが、第二章以下である。

ここで採り上げられるのが、『法華三昧懺儀』(第一節第一項)で、ついで『方等懺儀』(第二項)、および『六妙法門』が考察の対

象になる。これら三著が、「実践観の上にみられる新たな思想的展開」(第一節)として吟味されると共に、その実相観上の世界が解示される。(第三節『法華三昧懺儀』『方等懺法』『六妙法門』の表示する実相)すなわち『法華三昧懺儀』の「基本構造」と「実相の把握にみる新たな局面」を論じ(第一項)、さらに『方等懺法』における「教学思想の新たな形成への萌芽」に及び、さいごに『六妙法門』における新たな思想的展開を考察している。

以上は、まったく本書の章節を追っての、概説的介绍にすぎないが、すでに賢明なる読者は気付かれたように、一、二章とも実践観と実相観の二本立てで整然と所論が展開されているのは、問題の整理が行きとどいていばかりでなく、著者の智顛教学に対する基本的態度が方法論的に明確化されていて、理解を鮮明ならしめる。本書のすぐれた特長といえよう。

なお第二章 第二節「実践観の変容を導いた教学的背景」で、「慧思の実践観の次第観的構造」(第一項)と、「慧思における頓覚の呈示と智顛の立場」を考究しているのは、第一章 第一節 第三項「初期実相論の体系化

を導いた教理的背景」で、『大智度論』との関係を論じ、「慧思教学の及ぼした影響」を考察しているのに対応するというべく、かかる教学的、教理的背景に至るまで、初期と変容期とを整然と対照連関せしめて論及しているのは、よほど問題の整理が明快になされている証在といえよう。

このようにして論述は、第三章に至り、「実相論の新たな体系化」に及ぶ。そこでは『覚意三昧』(第一節)、『法界次第初門』(第二節)、『小止観』(第三節)の三書が考察の対象とされて、「新たな体系化」への経緯が詳究される。

以上をもって「三大部」への形成過程をおわり、第四章の「三大部」における実相論の構造」に至るわけであるが、この第四章を以て本論とするのが常途の説き方というべきであろうが、著者の初めに云える如く「三大部」への形成過程にこそ重要な関心を有したものであれば、あるいは本書は第三章までに主なる研究課題が含まれていると、云えるのではないであろうか。

そこで、第三章までを、一応振り返ってみると、第一章で、『次第禅門』と『方等三昧行法』が採り上げられて初期実相論の体系が論

究され、第二章において、『法華三昧懺儀』、『方等懺法』、『六妙法門』が摘出されて、その変容が推究される。第三章では、『覚意三昧』、『法界次第初門』、『小止観』に依って、実相論の新たな体系化が説かれている。

初期、変容期、新たな体系化の時期を代表するものとして、それぞれ選ばれた資料については、異論のないところではあるが、書誌学的に確定するには多くの困難が予想される。

この方面の研究は、佐藤哲英博士のそれに、著者はほとんど負うている如くであるが、佐藤博士ほど綿密精緻な書誌学的な基礎的研究は、部分的ならともかく、全体的にはほとんど望み得ないとすれば、それは当然のことかもしれない。

思想理解を体系的に得ることに力点を措けば、半面歴史的考証的な研究は第二義的となるのは不可避であり、この点著者は、ほとんど原典からの直接引用に終始して、従来の註疏に、全く耳を傾けていないのは、その註記を見れば瞭然としている。

しいて言へば、これだけの資料を扱っているのに、そこには、大正大学の研究紀要からの引用も、また叡山学報からの援用もない。

多少存するのは、著述を取扱った箇所のみと
いうことができる。

「はしがき」を見ると、本書は著者が東京大学へ提出した学位請求論文とのものであるが、この方がすっきりしていて、学問の性格が明快に解る。

私を含めて宗外からの、または伝統的な天台教学の範疇を離れての、智顛教学の本格的
研究には多大の制約と困難が伴うことは、い
みじくも関口真大博士と佐藤哲英博士との論
争にそれは鮮かに表明されている。(拙稿「五
時八教論争の収束」『駒沢大学仏教学部論集』
第十号参照)

その意味で、著者の如上の研究姿勢は、今
後における智顛教学研究への新たな指針を、
すくなくとも現時点において提示したものと
いうべく、高く評価されて然るべきである
う。

と同時に、智顛教学への直参を以て新たな
「天台宗学」の形成を目指される関口真大博
士にとっても、むしろかかる研究姿勢は、非
宗学的であると否定される反面、ある意味で
は容許される可能性も出てくるのではあるま
いか。

内容批判に立ち入るまえに、本書の残りの

構成に触れておこう。

前記のごとく、第四章は「『三大部』にお
ける実相論の構造」で、ここで著者は「円頓
止観の構造」(第一節)を、「正修行の基本的
構成」(第二項)、「行の基本的形式としての
観心」(第二項)、「観心論の実践的正当性の
理論的根拠」、「迷いと悟りを導くもの」(第
四項)、「観心の体系の基本構造」(第五項)、
「観心論の総合としての円頓止観」(第六項)、
「行位説をめぐる問題―その成立を導く思想
的要因―」(第七項)の各項に亘って詳論し
ている。

上乗の行論からすれば、著書のいう「実践
観」部門が、ここに集約、解明されることに
なる。

第二節が、「円頓止観の開示する実相の境
の内的構造」で、それは「実相表現の諸形式」
(第一項)、「実相の概念的表白」(第二項)、
「三諦説の形成を促した思想的契機」(第
三項)、「実相論と縁起の思想」(第四項)、「実
相の直接的表白」(第五項)の各項において、
上述の「実相観」の集大成が説かれる。著者
の方法的関心からすれば当然、第三項に力点
が措かれているというべく、成実、三論、そ
して淨影慧遠等との関係が論究されている。

第五章は、維摩經を中心とした「晩年の実相論」で、第一節『維摩經疏』における円教の体系」において、その「行の体系」(第一項)と「実相の境界」(第二項)とを追究し、『維摩經疏』の実相論の体系と『三大部』との関係」(第三項)に論及している。

ここでも、第三項が興味ある問題を提示している、これまで多くの論攷がものさされているのは周知のところである。

そしてまた著者の関心が、前述するように「三大部」への形成過程の解明にあるとするならば、完整された「三大部」から晩年の「維摩經疏」への移りゆきというか深化は、これまた当然興味の存するところであろう。

二

以上、多少内容に触れつつ、本書構成の梗概を忠実に述べたのであるが、読者はそれによっておおよそ著者の意図とするところと、そのスケールの大きさを理會することができるとであろう。

以下、より詳しく内容批判に立ち入りたいのであるが、紙幅の制限もあり、できるだけ簡潔にこれを述べてみたい。

先づ著者は、「原典の批判的研究を意図す

るのではなく、智顛の思想形成の跡を辿りながら、順次形成されてゆく実相論の内的構造を探るのがここでの主題」であるという観点から『禪門口訣』等の小品は、思いきりよく此等を切り捨て、「もっとも早い時期のものとして『次第禪門』『方等三昧行法』、つぎには『法華三昧懺儀』『六妙法門』『方等懺法』の一連の著述、そのつぎには『覺意三昧』『法界次第初門』『小止観』、あと円熟期の教思想を伝える「三大部」、最後に「維摩經疏関係の一連の著述」に、これらを整理限定し、従って時代区分も五期にわけられ、その思想的展開が考察される。

従来、「小止観」を境に、前後に分たれる常途の説よりも、実にキメ細かく思想発達段階をそこにみようとす著者の意図は、充分達せられたかたにみえる。

そして、前述の如く、伝統的な天台教学の説は、一切これを排して忠実に直接原典に拠り、あくまでも自己の樹てた方法論と「見取図」(本書一七頁)に随って、行論をすすめてゆく。

そこには、いわゆる智顛の「実相論」を、「それはつねに、諸法の実相||真実相の把握のために構想されるいわば行||実践に関する

教説の側面と、諸法の実相それ自体を内容的に直接開陳する真理に関する教理の側面との両者を合意するもの」と定義し、さらに「これから試みる行||実践に関する教理の整理は、禅であるとか懺法であるとか、あるいは止観といった、個々の行業の修法上の具体的な形式、方法、いかえればそれらの行業の事相的な作法面の整理を中心の狙いとして進められているというよりも、個々の具体的行を支える、行のいわば心理的側面—行の修習にあたっての心的態度の内的特質の解明を狙いとして」(本書一七頁) いる如く、明確な方法論と課題意識の下に、深い洞察と把握が、智顛の思想に行われる。

哲学分野からのアプローチとしては、かくあるべきものであり、従来「天台教学のもつ制約を一切無みするところ、爽快な感すら与えられる。

教観二門をはじめ、約部約教等の天台用語が、ひとつも出てこないのは、天台教学に無縁の人々にも、「実相論」の現代的理解を得せしめる上で、本書は役立つであろう。

よほど、こちらに明確な課題意識と方法論の冴えがない限り、従来「天台用語に振り廻わされずに、「諸法実相」を自分の身につ

たことばで、説き明すことはむづかしい。誰れでも、できることではない。この点、著者の力量に敬意を表したい。

したがって、本書を、漸次・不定・円頓の三種止観を例にとり、漸次止観に「次第禅門」を配し、不定止観に『六妙法門』を当て、円頓止観を『摩訶止観』とする古来の説相を踏まえて、さらに審細に『次第禅門』には『方等三昧行法』を加え、『六妙法門』には『方等懺法』と『法華三昧懺儀』を併せて、『摩訶止観』の前後に、『小止観』と『維摩經疏』を按配したと、安易な従来の天台教学的理解を示してはならぬ。

しかし、翻って考えてみれば、仏教教学というものは、いづれも対機のために説かれた施設にすぎぬから、機根に随って漸次止観を修するも、はた不定止観を習するも、また円頓止観を行するも、よしとされるより三種止観が平列的に説かれることになる。なにも思想発達の段階が解ったからといって、そこに利生益物の功德がなければ一切は意味をなさぬ、との立場をとる。むしろ思想発達の段階を無みするところに、仏教教学はしそれは宗学的要素を多分にもつものであるが―成立する。

が、かかる教学的立場を排した思想発達史的あるいは哲学的考察は、現代人の要請であり、本書は充分これに応えているとみてよいであろう。

ただ顧みられるのは、安藤俊雄博士の研究態度である。同じ哲学分野の出身であつても、安藤博士には従来の天台教学にも充分配慮するところがあつたと思われる。議論が晦渋煩瑣になるを懼れずに教学的思考を汲み上げ、反面、現代的思惟のスジを徹された。

しかし、それだからと云つて、安藤博士の天台学が、関口博士の目指す「天台宗学」にならないことは、『天台教学の研究』六四一頁参照）明らかである。

そこでは、本書の著者が依つて以て書誌学的根拠となす佐藤哲英博士の天台研究も、宗学としての天台学とは言わぬと明言している。

新たな「天台宗学の形成」を目指す関口博士の立場を、すでに「五時八教」廃棄論で同調説に入れられた筆者としては、充分理解しているつもりであるが、智者大師の著作そのものに実参実究せよという博士の根本主張からすれば立場こそ異なれ、本書のごとき研究も、いな本書のごとき自由な智顛教学直参へ

の成果がもつと出現するのが望ましいのではあるまいか。

洞門に、近代宗学らしい胎動が始つたのは昭和ヒトけたの後半からであるとせられるが、それが昭和初頭の和辻哲郎博士によるあの「沙門道元」の再発見——宗祖を宗外に解放せよという——に触発されたことは今日定説となりつつある。

新田博士の本書公刊を契機に、智顛教学研究の新生面が開け、同調者が多く得られれば、学界のみならず、天台教学としてもプラスではあるまいか。

（平楽寺書店、昭和五十六年二月二十日発行、九五〇〇円、B5版、本文六二八頁）